

## チームとして成果を出すために（体制づくり）

### 目的・目標を共有する

「チーム」として一丸となり何かに取り組むには、「目指すもの」、つまり、目的や目標の共有が重要です（図1）。目的とは「何のために」、目標は「どのような状態になっているか」ということですが、目標は、抽象的にならずスタッフ皆が「具体的にイメージできる状態」の表現が必要です。たとえば、「尊厳ある医療を提供できる職場づくり」という目的（職場の理念など）のもと、「褥瘡発生をゼロにする」という最終目標があるとします。そのプロセス（到達目標）として、「スタッフ全員が、褥瘡の要因となる拘縮の発生やその進行を防止するための、姿勢管理（ポジショニング）が実施できている」という「何のために」「どのような状態になっている」を明確にします。

「目的や目標の共有」という言葉は、日常的によく聞かれる文言ですが、これを実践レベルに「落とし込み」をしていくことが大切です。

まずは、各々の組織や部門内において、さまざまな情報が、スタッフに「どのような方法で伝わり」「認識され」、そして「実行されているのか」などを鑑みて、自らの組織内で「目的・目標」を共有していくための有効な方法を検討してみてください。

「目指すもの」の明確化が、チームとしての取り組みの入り口になります。そして、チームでの取り組みは、「チームのルールを知り守る」ことから始まります。

### プロジェクトチームの存在や組織図を明確にする

病院などでは、「褥瘡予防対策」について、対策委員会などが設置されていると思います。

チームケアの実現のために

目的：何のために  
目標：どのような状態になる

「チーム」として機能するためには、「目指すもの」の共有が不可欠

チームの一員として果たすべき、「役割」を明確にする



図1 チームで取り組むために必要な事項

このような委員会やプロジェクトチームの存在は、物事の推進には必要不可欠であり、組織として、その活動が保証されていることが大切です。それにより、「組織全体として取り組むこと」、「組織やチームの一員としてスタッフ全員が行うべきこと」という位置づけとなります。

組織図は、組織の内部構造を可視化したもので、部署や部門同士の相互関係や、指揮・命令系統がひと目でわかります。組織図に代表される体制の「見える化」は、報連相の円滑化など、スムーズな活動を推進するために必要です。

リンクナースなどの存在は、部門内での責任の所在を明確にすることができ、「チーム力」の向上とともに、リンクナース個々の成長につながっていることと思います。

今回のテーマである「拘縮予防」ための取り組みに着眼した役割についても、所属の実情に応じて対策委員会内などで位置づけを明確にすることが望ましいと考えます。

### 姿勢管理のassessment・プランニング担当者を定める

チームのなかで役割を定めることは、タスクの停滞や抜け落ち防止になります。

たとえば、理学療法士や作業療法士やリンク

①定期的に実施するもの  
※どのタイミングで実施するかを明確に定める

②スタッフの「気づき」によるもの  
※「誰に」報告するかを明確に定める

	いつ（いつまでに）	誰が	何を	どのようにする
姿勢評価（アセスメント）・分析				
プランニング（リスク低減策）				
対策方法の周知				
実施				
モニタリング（結果の確認と記録）				

図2 拘縮予防のリスクマネジメント体制

ナースなど、各職場に応じてアセスメントやプランニング担当の適任者を検討してください。

アセスメント・プランニング担当者は、拘縮予防のための姿勢評価（アセスメント）や姿勢管理のプランニングなどを実施し、個々の対象者に合わせて実践レベルに「落とし込む」役割を担います。実践レベルでの落とし込みとは、アセスメントやプランニングした内容をスタッフに伝達し、その実践の様子や効果を確認していくことを指します。

### 拘縮にかかわるリスクマネジメントの体制をつくる

褥瘡発生のリスクアセスメントについては、すでにさまざまなアセスメントツールが存在し、活用されている場合が多いと思います。組織内で統一したアセスメントツールを活用していくことは、個々の対象者へのケア向上に留まらず、その情報を収集することで、組織全体としての取り組みの優先順位を定めていくことに大きく付与します。

どのようなリスクを備えた対象者が多いかを知ること、業務改善の着目点や連携の必要性、備えておくべき備品、補うべき知識・技術が、具体

的にみえてきます。また、組織やチーム内で、優先的に取り組む事柄の共有にも活用できます。

拘縮の発生や進行の要因はさまざまです。臥床時間が長い対象者で頻繁にみられる股関節の屈曲拘縮など、褥瘡発生に大きく影響を及ぼす拘縮は、「好ましくない姿勢の保持」など、日常の積み重ねにより進行すると考えられるものが多いため、姿勢に関するチェック表を作成することは、リスクマネジメントとして有効と考えます。

さらに、拘縮が進む前にそれに「気づき」、リスクの芽を摘み取る「リスクマネジメント体制」が必要です。リスクマネジメント体制には、「定期的に実施するもの」「スタッフの『気づき』によるもの」の2種類の体制づくりが求められます（図2）。

### リスクマネジメント体制

#### ①定期的に実施するもの

個々の対象者については、入院などのタイミングで姿勢評価などを実施します。「誰が」「いつまでに」「何を評価するのか」、その情報は、「どこで」「誰により検討されリスク低減策を決め」「どのように周知しケアに取り入れるのか」「実施した内容を